

1

支援にさまざまな工夫が必要な 第三のタイプの愛着障害

★第三のタイプの愛着障害ⅡASDと愛着障害併存タイプ

第1章③で、愛着障害には「脱抑制タイプ」「抑制タイプ」と、もう一つ、第三のタイプとして「ASD（自閉症スペクトラム障害）と愛着障害併存タイプ」があることを説明しました。その中でも述べましたが、先天的脳機能障害である発達障害を持って生まれてきたこともありますが、その後天的に誰とも愛着形成できず、関係性障害である愛着障害を併せ持つことは、当然、想定されることにもかかわらず、現状、精神医学界では、発達障害と愛着障害を併せ持つ診断ができない診断基準を設定しています。しかし、現実には、この発達障害と愛着障害を併せ持つことものの支援に困難が生じている例が一番多く、ご相談も多いのです。

この第三のタイプは、独特の特徴があり、支援にさまざまな工夫が必要となります。ASDへ

★
ADHDと誤診された第三のタイプの愛着障害の支援事例

の認知支援、愛着障害への感情支援、どちらでも生じる行動の問題への行動支援が必要です。愛着の支援としての安全・安心・探索基地機能の支援と、ASDへの居場所機能の支援としても必要である人間関係支援を、そこにいかにして組み合わせるかが重要となります。そして、愛着障害への支援が効果を持てば、それが感情コントロール効果を生じ、ASDへの支援の効果がアップするのです。こうした事例を紹介してみましよう。

【事例4】 小学校三年生の男児Sくん。勝ち負けへのこだわりが強く、ゲームなどで自分が負けると相手を攻撃したり、すねてモノを投げつける。去年クラスが同じだった児童の顔を見るなり表情が一変し、その子が今日は何もしていないのにいきなり殴りかかり、何度も殴った。それを止めようとすると泣き喚き、地団駄を踏み、大暴れし、教師一人では止められず、数人がかりで押さえないといけなくなったことがある。武器や恐竜が好きで、そのコレクションの本を好んで読む。「死ね！」「殺すぞ」という暴言がよく出る。スピーカーから出る楽器音が嫌いで、音楽の授業には参加しない。「器械体操は見学でもないと言ったよね」と、一度認められたことには次回も必ずそうすることを要求する。支援学級では比較的落ち着いているが、「これがしたい」等、いろいろな要求をする。

突然の攻撃行動があることから、それが衝動的行動と誤認され、ADHD（注意欠如多動性障害）との診断がされていましたが、Sくんの攻撃性には、典型的な第三のタイプの愛着障害の特徴が見られます。

まず、その衝動的に見える攻撃は、ある行動をしているときに、突然別の行動が割り込む衝動性によるものではなく、Sくんの表情が一変していることから、感情が関与したフラッシュバックによる攻撃であることがわかります。去年クラスが同じだったこどもの顔を見た瞬間、嫌な思い出と感情が突然よみがえり、制御できずに突然攻撃したのです。コントロールできないネガティブな感情が関与している証拠に、その行動はなかなか止められず、執拗に攻撃します。

また、去年クラスが同じだったこどもは他にたくさんいるのに、その子だけを攻撃するのは、特定の対象のみを攻撃する執拗さで、これは自閉の特徴である焦点化された認知に、愛着障害の特徴であるネガティブな感情が密着した結果、生じているのです。ですから、その攻撃を止めようとすると、その密着を正面から剥がされることへの抵抗と、そのことで生じるさらなるネガティブな感情が増幅され、激しいパニック攻撃となるのです。ADHDではありません。

自閉の特徴である認知の偏りが、武器や恐竜など好きなものへのこだわりとなります。愛着障害があることで、自己高揚による優位性への渴望から、そのこだわりの対象が強いもの、攻撃性のあるものになりやすくなります。自分にとって優位なわがままの要求に固執するのも同様です。

暴言は、愛着障害の特徴からネガティブな感情の紛らわせとして生じ、自閉の特徴であるエコラリア（反響言語）として繰り返しやすくなるのです。

また、自閉の特徴である知覚（感覚）異常が、スピーカー音への知覚（感覚）過敏として現れています。Sくんの場合もそうでしたが、大きな音でも太鼓の音等は平気で、知覚（感覚）過敏と知覚（感覚）鈍麻という相反する特徴が併存するのが知覚（感覚）異常という特徴です。このことから、ASDの激しい攻撃性を、刺激に対して激しく反応しやすいという「易刺激性」でとらえようとするのが現状の精神医学界のとらえ方ですが、このとらえ方にも賛同できません。その激しい刺激反応性がなぜ起こるかの説明ができないからです。筆者は、愛着障害との併存がその原因で、自閉の強さと愛着の問題の強さの「かけ算」の答えが、この激しい攻撃性と、後述する「固まる」というシャットアウトの行動の強さを説明できると考えています。愛着への支援がこうした行動の問題を激減させることによっても説明できます。その支援のあり方を説明しましょう。

「逸らす」「おろす」支援

まず、攻撃行動への支援の仕方ですが、真っ正面からの支援だと、攻撃性の原因であるネガティブな感情を減らせず、よけい増やし混乱させてしまうこととなります。その攻撃が激しく、どうしてもいったん収めないといけない場合は、前から抱きかかえるのではなく、「後ろから抱きしめる」方法を使います。

そして、その攻撃行動と、密着しているネガティブな感情とを切り離すには、「引き剥がす」というやり方が最も抵抗されます。焦点化された認知とそれに密着した感情を「逸らす」「ずらす」

支援が効果的です。例えば、Sくんが好きな恐竜の絵本を見せて逸らします。「ステゴザウルスのこのとげはかっこいいな」などと（武器は攻撃を連想させるのでこの場合は避けます）。認知と感情が興味のあるものに逸らせられれば、目の前の攻撃対象に密着したネガティブな感情を結果的に剥がすことができるのです。

何で気持ちを選らすことができるかは、こどもによります。学校では使いにくいスマホ、DVは、保育所や施設では使用可能です。視覚だけでなく、音や身体のある部位を触ること、聴覚や触覚で逸れる子もいます。こうした対応が必要です。

逸らすには、タイミングも重要です。一度、その刺激で逸れなかったからといって、その刺激はもう使えないと思つてはいけません。しばらくしてから、また「恐竜」で試してみると、今度は逸らすことができたという場合もあります。

また、その場にいなかった人がどこから現れて、「いい天気だね。お花でも見に行こうか?」と雰囲気を変えるように誘って逸らすという、違う人で逸らす方法も使えます。クールダウンで「水を飲むこと」で落ち着きやすいのも、場所を変えて視覚・聴覚を変えた後、触覚・味覚を変えることで逸らしている効果です。こうしたクールダウンに誘うにも、その場にいなかった人が誘うほうが誘いやすいのも「逸らし」の効果です。

「振り返り」により「認知を広げる」支援

「逸らす」ことでそのときの攻撃行動が収まったとしても、次にその攻撃行動を起こすのを防ぐ

ことはできません。次の攻撃行動を防ぐ支援は、「振り返り」により「認知を広げる」支援です。「さつきしたことを思い出して！ どうしてやってしまったの？ 反省しなさい！」という振り返りは、最悪のかかりです。もう一度、ネガティブな感情と密着した行動を想起させ、自分でそれを解決しなさいと強要しても、できるはずがないのです。再度、感情混乱を引き起こすことになるだけです。愛着障害のあるこどもは、ネガティブな感情を直接何とかすることは一人ではできません。

振り返りは、キーパーソンがこどもの代わりに行います。「これに腹が立って、嫌な気持ちになったんだよね。今度、嫌な気持ちになったときは、これをしてみよう」というように。

このとき、「これが嫌だったというとき、こう思うと少し許せるね」「これはこんなふうに受け取ってみよう」などと認知を広げる支援をすることが、攻撃的反応の発生頻度を低下させることにつながります。Sくんの場合、「器械体操の中でも鉄棒は触るとちよつと武器みたいだから、鉄棒は許せるよね。鉄棒だけやって見学しようか」と、こだわっている見学を禁止するのではなく、それを認めつつ、「これもあり」と許せるモノを一つ付け加え認知を広げていくのです。

習得すべき行動を報酬感と報酬感で挟むサンドイッチ支援

そして、ネガティブな感情をなくすのに一番効果があるのは、ポジティブな感情、いい気持ちを生じさせる回路をつくることです。

こどもへの報酬支援は、普通、「何かができたらいいことがある」というパターンで行うことが

多いです。しかし、ASDを併せ持つ第三のタイプの愛着障害の場合には、このパターンに誘おうとしても、何かをすること自体に抵抗して、入り口でこのパターンに入ることを拒否されてしまい、支援が成功しなくなります。このパターンに固執するのではなく、違ったパターンも必要になります。

事例のSくんの場合は、支援学級で、まずキーパーソンと最初に好きなゲーム、ごっこ遊びをします。もちろん、キーパーソン主導で、その日の遊びを提案し、時間、もしくは、何サイクルするかを先に決め、それをして楽しい気持ちになったことを確認し、その後、学習活動をする、それをした後でまた、報酬になる楽しい活動をするというパターンを決めました。こうすること、この場所では、必ず、キーパーソンが楽しくなる活動を提供してくれる、その気持ちを確認した後なら少し嫌な学習もできる、それができたらまた楽しい活動ができる、という報酬感と報酬感の間に習得すべき行動を挟むサンドイッチ支援が効果的なのです。

二こがポイント、理解と支援

ASDを併せ持つ第三のタイプの愛着障害への支援では、ASDへの認知支援、愛着障害への感情支援、どちらでも生じる行動の問題への行動支援が必要となる。そして、そこに人間関係支援をいかに組み合わせていくかがポイントとなる。愛着障害への支援が効果を持てば、感情コントロール効果が生じ、ASDへの支援の効果もアップする。